『名家歴訪録』中　より「儒家　故宇田栗園」

国会図書館デジタルコレクション　黒田天外(譲)著　明治三四年
適宜、見出しをつけ翻刻しました

生い立ち

同年(明治三十一)十一月二日、栗園宇田淵翁を下切通川原町西入の邸に訪ひ、導かれて一室に入る。須臾にして翁は莞爾として出来り坐に着く。余乃ち初対面の挨拶をなし、来意を告げ、且つ曰く、先生は何地のお生まれでございますか。翁曰く、私は京都の西の在で、西岡六十四ヶ村中神足村といふに生れました。亡父は利記と申し、北岩倉実相院門跡の未勤の家来で、それで神足村に於て医を業とし、私は其六人目の末子です。亡父は医学を海上随鷗――之は京都で初めて蘭法を用ひた人で――に、読書は伊藤東所に学び、国学は本居太平につき、それで田舎で医業をしながら、旁ら漢籍国書を読で楽しんでゐました。また私は医術を豊後から出た宗眞哉に受け、読書は嚴垣松苗の門人で、十九歳頃から同じ西岡在で、向日町の東に当る土川村といふに寓居して、ここで藪医者をやって居ましたので。

梁川星巖との出会い

元来亡父は大平の門人で歌を詠みましたから、汝もやれとのことで十一二の時作ってみましたが、兄共は皆詩をやって、自分もその方が面白くなり、夫からは詩ばかり作って居ると、丁度星巖翁が晩年に京都へ参られましたので、それから其門に入て益々詩をつくりました。処が御承知の通り星巖翁は勤王憂国の人でございますから、私共が詩をつくって見て貰ひ、その話が済むといつも談が国事に及んで慷慨されるから、いつか知らず識らず夫に化せられて、国事が気にかかってならんやうになりました。

梁川星巖の死

其後国事は益々多端となり、安政戊午の年に間部下総が上京して、梅田雲濱、頼三樹、その他草莽有志の士を捕へ、鶏籠で江戸へ護送した時に、星巖翁も存生なれば一番に縲絏は免れん人でございましたが、不幸中の幸で、其前に流行のコロリに罹って歿しられましたから、遂に其義に及ばなんだので、然し幕府では殆ど手を下さんばかりになって居たのですから、全く自殺したものであろうと疑ふて、町奉行では墓を発いて検視するといふ伝聞もありま

したが、遂にそのこともありませんでした。

土川村で草莽の志士を匿う

然し其門に遊んだものは厳重に探偵され、私も土川村に居ます時で段々探偵を入れられ、また隣家には番人、即ち幕吏の手先を働らく者が居て、頻りに目を配ってゐる様子が知れておる。然し其後も草莽有志の士が、幕府の捜索を遁て尋ねて参り、潜かに宅にかくまい置たことも縷々ありましたが、極めて秘密にしてゐましたので、幕吏も気がつかず幸に無事でございました。

岩倉具視のもとで戊辰戦争を戦う

其後岩倉老公に謁することになって、老公も非常に篤く遇して下さる。私もまた之こそ為すある人じゃと、心を傾けてお話しもする・・・。其頃は過半京都へ参って、形成を考へてゐました。処が時勢は追々切迫して徳川慶喜は二条城を去て浪華へ下る。つゞいて鳥羽伏見の戦争から、徳川氏追討の兵を発しられることとなり、岩倉家の公子具定、其弟具経、この両公子が東山道総督、並に副総督として出張されることになりました。其時に具定は十八、具経は十六で、いづれも真に若ふございますから、老公から私と、今皇后大夫してゐる香川敬三と、外一人に格別のお頼みで、息子も何分若いからよく補佐してくれるようとのことで、私は出張先で東山道総督参謀の辞令を受け進発しましたが、いや此時程愉快なことはありませなんだ。何分積年幕府の朝廷を蔑ろにする模様を見て、常に切歯してをったものが、今や錦の御旗を飄がへして堂々と征討に出張するなど、まるで夢のような心地して、かつ狂しかつ喜び、身を提して力を盡そうと思ひました。それで始終総督の傍に居り、役には立ませんが心だけは補佐して江戸へ参り、こゝで五十日程滞留してゐました。が元来私は脚気の病疾がありますから、江戸は最も同病の流行る処で、それが為め再発して治療しても治らず、止を得ませんから遂に御暇を願って当地に帰り、やはり岩倉家の方に居まして、同家の執事同様のことを致して居ました。

桂宮家令から主殿寮出張所長へ

尤も私は其時再び西岡へ帰り医業をやろふと思ふて、御暇を請ひましたが。老公はいや之から御用に立んならん場合があるとて聞れません。其後明治二年に朝廷に召出されて徴士権辯事となり、次で辯事となり、聖駕御東幸の時に、当地に留守官といふを置れ、其判官となり、留守官が廃せられた時に辞職して、之から閑散で楽しもうと思ふてゐると、中一日隔てゝ桂宮の家令を仰せ付られ、其後有栖川、閑院、久邇、山階など諸宮様の家令御附等を拝命し、明治十九年に主殿権助に任ぜられ、二十二年に主殿助、主殿寮京都出張所長となり、二十八年、即ち一昨年まで勤めて居りましたが、最早七十にも近ふございますから、少しは余命を楽しみとうございますと内々御願ひ申し、遂に同年七月に本官を免ぜられまして、初めて閑散の身となりました。

岩倉具視の人物像を語る

余問ふ、先生が初めて岩倉老公に御謁しになったのは、何歳位の時でございますか。翁曰く、そうです、私が東山道へ出張しましたのが四十二で、俗にいふ厄歳でございましたから、何でも其三四年前です。其頃寺町の広小路上る処に、岩倉実相院の里坊がありまして、それを岩倉殿が借て家族を置れる、自分は御勘気といふので岩倉村の小さい民家に居て、時あって忍んで里坊へ来やしやるという有様でした。余問ふ、老公の風来性質などは如何でございますか。翁曰く、私は初て謁しました時に、眞に英雄といふのは此お方じやと思ひました。只に私のみでない、誰でも一見すると忽ち心服して、此方の為には力を盡そうと思はぬものはない。固より容貌・態度威厳余りあつて、眼光は熒々人を射る程でありましたが、謁してお話しをすると、いかにも打寛ろいで、賢を禮し士に下る・・・それで人を能く容れて、共人相応に長所を以て遺ひなかく遊ばして置ん、始終用をいひつけて困る程つかはれたです。余問ふ、老公の其資質は、胸中に蘊蓄せる学問の素養から来たのですか、ただしは天稟でございますか。翁曰く、学問は一向ないので、ただ天稟の人に絶した処があるのですな。それで老公が常に、及公は山陽の外史くらい読んだことはあるが、学問は全然でしたことはない。然し諸君の種々よい説を聞て、それを我物にしてつかいこなすのは上手でみると云はれました。余問ふ、夫では幼時より□難なさったようなことはございませんか。翁曰く、左様、あの老公は堀川家の子息で、岩倉家へ養子に参られたのですから、多少□難もされたかも知れませんが、別に之といふ程の事はないので。何分子供上りの時よりなかく横着者であったそうです。・・・それで人情に篤い方で、人の事など十分に想ひやって、憐憫の心も深く、すべての古の英雄豪傑のそれくよいことは、殆ど具備してみた人でございます。

私の学問

翁はこの時語端を改めて曰く、それで私の学問につき少し御話し、ますが、学問といふて別に深く学んだわけでない。巖垣松苗、之は読書の師で、未だ私の若い時に死にました。其後星巖翁に詩を学んだのみですが、—この星巖翁につき、世人はたゞの詩人と思ふて居ますが、決してそうでない。晩年は専ら道学に志し、深く学んでゐられらので、処があの先生の学問が陽明学で。一番最初は陳白沙の詩を読で、而して王陽明に入り、夫より王学を祖述した劉念臺、羅念庵などの書を究められたです。その説に、陽明の学問は固より一点間然する処がないが、其高弟たる王龍溪、其他一二輩に至ては、動もすれば其説が虚遠に騖せて禅学に傾く嫌ひがある。それで其弊を救ふため劉念臺、羅念庵の書を併せ読んで、王学を初めて正晧を誤まらんことになる。—こういふ談語は折々星巖翁から聞ました。固より暇もなし、講義など、いふことはなかつたが、ただ何を読めばよいと其書物を差図してもらふた位で。・・・それで私も以前四書集註など読んでゐて、少も感発する処がなかったが、陽明の傳習録を読で初めて興起感発してぢっとしてゐられんことになり、学問は陽明でなけりゃならんと思ひました。それで私の経歴中にも、自分の心に之は陽明先生のお蔭である、またこの様なことは陽明先生に叱られると思ふたことは縷々ありました。

神世をうけししきしまの道

また私は近年歌を詠みますのを、世上では誤り傳へて、私を国文学者のように思ふてゐる人があるそうですが、私は決して歌学をして歌を讀むのでない、只心に思ふことを折に触れて詠出すので。語格や「てにをは」も固より必要でありますから、此末余命があったらぽつくやつて見ようと思ひますが、仮令語格や「てにをは」をよく知らんでも、真情から流露たものは自然に之に合するのが和歌の活物たる所以です。と、これより他の歌学者の歌が、専ら粉飾に流れて生意に乏しきを諷し。且つ曰く、詩は近来作らんことにしました、之には私に少しく意見があるので、と、□々数千言を累ねられしも、其大意は本邦自づから和歌の在るあり、強て外国の詩形を仮て以て胸臆を攄るに及ばず、冷泉為輔卿の歌に

　これのみぞ人の国より伝はらで
　　神世をうけししき島の道

とある、其和歌にて足れり、否、寧ろ之を学ぶが邦人の本色なり、云々。といふにあるも、其詩歌の各包容、特長等、概して計較の外に在り、況や西詩の調和等に於ておや。余は翁が此神国的国体観念を以て詩論を断じ、且つ精力の分るゝを以て、断然其多年修練したる漢詩を廃棄し、以て琅々の音を洩らされざるを惜しむ。

黒田天外の評価

翁今年七一歳、面も双頬微紅を帯て、客に対する常に怡々如たり、以其内に養ふ処の深きをみる。嗚呼王事に盡瘁せし翁の如く、道徳を修練する翁の如き、實に王門の徒たるに背かすと謂ふべし。詩歌の如きは殊に其余技なるのみ。談話三時半、即ち辞し帰る。